

三月字佐見のお茶の会

連作本格推理

アリア系銀河鉄道

ARIA

柄刀一



KOBUNSHA BUNKO



光文社文庫

連作本格推理

アリア系銀河鉄道 三月宇佐見のお茶の会

著者 柄 刀 はじめ

2004年4月20日 初版1刷発行

発行者	篠	原	睦	子
印刷	萩	原	印	刷
製本	関	川	製	本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Hajime Tsukatou 2004

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73661-0 Printed in Japan

図本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

連作本格推理

アリア系銀河鉄道

三月宇佐見のお茶の会

つかとうはじめ
柄刀 一



光 文 社

目次

言語と密室のコンポジション ————— 5

ノアの隣 ————— 71

探偵の匣 ————— 167

アリア系銀河鉄道 ————— 253

解説……佳多山大地／二階堂黎人／福井健太／巽昌章 ————— 329

アリスのドア～ Bonus Track ～ ————— 351

あとがき／プラス文庫版あとがき ————— 398

文庫版解説……太田忠司 ————— 403

言語と密室のコンポジション

「わたしの名まえはアリスですけど——」

「ばかげた名まえだ！」とハンプティ・ダンプティは、
がまんしきれぬというようにさえぎりました。

「それにどんな意味があるのだ？」

「名まえに意味がなくてはいけませんの？」

とアリスは怪しんで聞きました。

「むろん、そうだ」とハンプティ・ダンプティはちょっと笑って、

「おれの名まえはおれの形状を意味する——なんとまた、

申し分のない、品のいい形だろうが。

お前のような名まえだと、

どんな形をしてたっていいことになる」

1

木漏れ日のちらつくいつもの席に座り、宇佐見護博士は紅茶の葉を選ぼうとしていた。まさに至福の時、という満ち足りた微笑でそのほっそりとした顔は包まれている。

セイロン、アッサム、ダーズリン……。

春の訪れを感じさせる明るく澄んだ風に合わせ、ウバにしよう……。茶葉のサイズはオレンジ・ペコー。

来客の予定はないので、茶はスプーン四杯。二杯は自分に、一杯はティーポットに、もう一杯は、風に乗せる香りのために。本来なら、高級茶に「ポットのための一杯」は必要ないのだが、宇佐見博士は、そう振る舞いたくなる自分の気持ちを優先させた。

いそいそと湯を沸騰させ、リーフを蒸らし、カップに注ぐ。

たちのぼる香り……。

その馥郁とした鮮やかなフレーバーが、うっとり半眼になった博士の鼻を押しあげる。その鼻の上に載っている小さなメガネの丸いレンズも、さらに輝きを増したようだった。

赤味を秘めた琥珀色の紅茶の上には、柔らかな光が、縁側でまどろむ猫のように――

「わっ」

どうしたわけか、目の前にいきなり、真つ白な猫が横たわっていた。それどころか白い丸テーブルだったはずのものが、茶色い板張りになって廊下のように横に延びている。

博士が目をぱちくりさせていると、眠そうにしていた目の前の猫が――その猫は懷中時計をぶらさげていた――博士に向かって口をひらいた。

「すると、あなたが探偵役か」

「……失礼だが、何だって？」

「あなたに協力してもらわなければならないんだ」

そう言いつつ、猫はまるまっこの手で懷中時計を持ちあげた。

「ああ、遅刻する！ 忙しい、忙しい」

「失礼だが」宇佐見博士は重ねて言った。「そういう台詞はウサギにこそ似合うのではないかな」

すると猫は、眉――どこが眉だかはつきりしないが――をひそめて不平を返した。

「あなたが『猫』と描写するからこうなってしまったのではないか。それを棚にあげて、不調法に」

「不調法と言うなら君もそうではないかな。ひとの紅茶の上に寝そべったりして。それに、

懐中がないのに懐中時計というのも、どのようなものか」

そこで宇佐見博士は、ようやくわずかに尋常じんじょうな感覚を取り戻して軌道きどうを修正した。

「描写だって？ いや、そもそも、これはどういうことなんだい？ 説明してくれないかな」

紅茶に蒸されていて、熱くないのか、寝そべったままの猫は平然とした様子で頷うなずいた。ただ、言葉づかいは改めて、

「いいでしょう。つまり、あなたが地いの文いで思いい描いいたことがこうして実体化したわけです」

「地の文……」

「わたしは本来、光のような靈氣としての存在なのですが、それが、縁側でまどろむ猫として形になってしまったのですよ」

博士にもどうにか呑み込めてきた。それを受け入れるかどうかは別にしても。

「するとここは縁側なのだね？」 椅子に座っている博士は、テーブルの上面部分じょうめんぶんが化けてしまった板張りの廊下のようなものに沿って視線を左右に走らせた。「しかし、縁側というのは膝の下にあるものじゃないかな」

「それはあなたに、室内側からの感覚が染みついていてからですよ。庭のほうに座って縁側に向けばこんな感じでしょう」

「うーむ、何とも珍妙な構図になってしまっているみたいだな。普通の人が見たら目を丸くする。……まあ、この事態がすでに普通ではないが」

「落ち込むように言わないでくださいよ」

そこで奇妙な猫は、カップの上でようやく居住まいを正した。猫のくせにあぐらをかくという非常識さはそのままだったが。

「紹介が遅れました、わたしは『字義原理・実存の猫』と申します——今は。わたくしめが介在したために、このような現象が起こっているのですからね」

自己紹介した猫は顎あごに手を当て、独り言のように付け加えた。

「たぶん『半眼になった博士の鼻』という『は音』の頭韻とういんの三つのつながりが、ここへのチャンネルをひらくきっかけになったのだな」

下を向いていたその猫は、短い両手をあげ、でっぷりとした自分の体を眺め回した。

「でも、どうして真っ白なんでしょう」

「それはおそらく、この紅茶のせいだろう」

宇佐見博士はそう言いつつ、ティーカップを猫の下から引つ張り出した。

「ペコーとはもともと、白い毛の意味でね。茶の若い芽や葉に、そうした産毛うぶげが生えていることから命名されているようだよ」

「なるほど」

博士の順応の早さに驚いた様子ながらも、今やソーサーに座っている猫は、首からぶら下がっている重たそうな懐中時計にまた目をやった。

「ああつ、遅刻する。急がなければ、急がなければ」

博士も心配そうに、

「どこへ行くんだね？」

「行くんだね、って、あなたも同行するのですよ、宇佐見博士。ミステリーの現場へね」

「ミステリーの現場」博士の瞳がきらりと光る。

「そう、それも……」

猫は辺りをはばかりように、

「密室殺人なのです」

息を呑んだ後、博士も小声になり、そつと顔を寄せた。

「『雪』かな、それとも『三重』？」

猫は周囲に目を配り、

「言語、です」

「ゲンゴ……？」

聞き間違いかと思った。ゲンゴロウだろうか？ しかしゲンゴロウの密集によって構成された密室というのもぞつとしないので、宇佐見博士はその想像を振り払った。

「いやだなあ、博士」

と、猫は、豊かな肉球にくきゅうの手を振った。顔の前で振りたかったのだろうが、短くて顎の前で振っていた。

「言語ですよ、言語。そうでなければ“字義原理・実存の猫”としてのわたしが、ストーリーの中で浮いてしまうではありませんか。プロットの流れを考えてくださらなければ」

どこへ登場しても浮いてしまう存在だとは思ったが、根が紳士である宇佐見博士はそんなことは勿論もちろんおくびにも出さなかった。

それでも猫はじいっと博士を見つめ、

「地の文で思っていれば同じことですよ」

と、すねたように言った。

「いや、失敬。……しかし、“字義原理・実存の猫”だって？」

「そうですとも」猫は両手を後ろについてふんぞり返った。

「字句にこだわる原理主義と言えば……」博士が言う。「イスラム教の一派などの厳格な心酔者をすぐに思い浮かべてしまうが」

「信念と言いますか、狂熱と言いますか」猫が深く目をつぶる。「シャーロキアンにとってのホームズものの聖典。ユダヤ・キリスト教原理主義者にとつての聖書。彼らにとっては、記されている文字の一字一句が、現実と対応する真実なのです」

「そうだね」

博士は、創世記の一文を思い出す。その冒頭では、神を意味するヘブル語のエローヒームは複数形なのに、それが用いる動詞は単数形になっている。その変調はしかし、聖典信奉者にとつては、神の三位一体説の証左という輝きをもつ。

「うん、そうそう。他にも思い出したよ、ある聖書原理主義派が用いる面白いロジックをね」

と、独り言めいて言うのと、博士はゆるやかに腕を組んだ。

「こんなものだね。聖書では、キリストは金曜に磔はりつけにされ、日曜日に復活したとなっていない。しかし一方で、三日三晩の後に復活したとも記述されている。これは明らかに矛盾ではないかと異教の合理主義者は責める。金曜から日曜までは、二晩と二日しか経っていないわけだから。聖書には様々な不合理が記されているけれど、一般のキリスト教徒は、その辺の聖書の教えは、一種の象徴ととらえることで信仰としている」

「でも、原理主義派にとっては、一字たりともゆるがせにできない絶対のもの」

「そこで先ほどの問題にもこのような解釈を行なう。復活を行なうまでキリストが過ごした時間は二晩と一日だ。金曜から日曜までの間にあるのは一日と換算すればね。そしてこの間、地球の反対側では一晩と二日が過ぎている。合わせると三日三晩ということになる。つまりイエスは、地球の上のすべての人のために死んだのだということを、三日三晩という記述は

教えてくれているというわけだね。限りなく字義のほうを尊重しようというロジックだ。外から見れば当然、歪み^{ゆが}を内在しているわけだが……」

「でもね、博士」

内緒事^{ないしょごと}のように「字義原理・実存の猫」が言う。

「これから行く所は、字義をロジックで守ろうとしているような甘い世界ではないのです。

字義が、文字どおりそのまま現存している。純粹原義の世界なのですから。でも、今の宗教思想による解釈問題のような、地球的なスケールや歴史的な重みなどは期待できません」

と、猫はまた手を振りつつ、

「密室殺人をほんの一つ解決してもらいたいただけですから」

猫はそして、懐中時計を慌て^{あわ}てて覗き^{のぞ}込んだ。

「ああっ、本当に遅刻だ！ 話し込んでのんびりし過ぎた。さつ、博士、急いで行きましよう！」

「行くって、どうやって？」

「常套句^{じょうとうく}ですよ。別世界へ引き込まれるような、意識が遠のくシーンをくつきりと思い描くのです」

「うーん、そう言われても……」

それでも頼まれ事には真面目^{まじめ}に応える博士は、地の文を懸命に思い描こうとした。暗闇に

引きずり込まれるように……。地面がせりあがってくるかのように……。そして結局博士の意識は、水流が渦を伴って奈落へ落ちるように、暗黒の別世界へと溶け込んでいった……。

* * *

2

意識が戻った時、自分がちゃんと地面に立っていたので宇佐見博士は驚いた。

ここは深い森の中のような。太い幹の木々は豊かに茂り、心地よく湿る大気には、無数の小鳥たちのさえずりが満ちている。高く澄み渡る青空を取り巻く真っ白な綿雲も、目を奪う美しさだった。

しかし何よりも博士の視界を圧したのは、その巨大な建物だった。

天を支えるかのように、石造りの塔がそびえ立っている。

「あそこが現場ですよ」

耳に馴染みつつあるその声に引かれて足元へ目をやると、“字義原理・実存の猫”が博士のほうを振り向いていた。日常的な猫のように前足も地面についている。